

1
今日も、6月の雨が降っている。

そして、わが地球・銀河系は、ビッグ・バンの風に吹かれて、秒速600キロメートルをこえるスピードで、直径150光年はあろうと思われるおとめ座銀河団の方角へと疾走している。地球の暦では、もう20世紀も終ろうとしていた。世紀末の、ある年の夕方、6月の暗い雨が降るなかを、X氏は、いつものように、駅からのゆるやかな勾配を海へとのぼした坂道をゆっくりと歩いていった。

6月の草が雨に濡れて、濃い闇のなかで白く光っていた。街灯のうす青い光のなかで、雨滴がびちびち反ねて、眼の前に幾条もの雨の糸が流れ、光のとどかぬあたりには濃い闇が巣くひ、ものの形を消し去ってはいるが、不意の風に草むらが騒ぎ、一瞬のざわめきが草たちの呼吸とも思えた。

幾重にも重なった濃密な雲のベールは、弓状の列島をすっぽりと覆い、地表のあらゆるものは水の膜を被り、雲の質量とその行方は、測量を拒むほどのものと思われ、豪雨でもなく、台風でもなく、暴風雨が吹きあれるという程のものでもないのに、毎日、毎日、細い雨が降り続いた。樹木